

千葉の海辺 新聞コンクール

■執筆・紙面構成 林下 凜音 船橋市立飯山満小学校5年

民話の舞台をたずねて 長福寺の裏山、特別に訪問



民話の舞台となった長福寺の裏山。仏像に花が供えられていた



船橋の民話「雪どけ塚」の白ヘビは、嵐の中でヘビの目の光が漁師を助けた話だった。かつて、漁師の助けとなつた船橋大神宮の灯台を取材してきた。自然豊かな船橋大神宮にある灯明台は、民間の力で1880(明治13)年に作られ、1895(明治28)の常夜灯だったが、19世紀年まで働き続けた。

や写真撮影など新聞制作に挑戦した。日本財團などオールジャパンで推進する「海と日本プロジェクト」の一環で、国内に残された海にまつわる「民話」「伝承」を選定し、子どもがさらに次世代へと伝える機運醸成を狙っている。船橋市立飯山満小学校5年の林下凜音さんが執筆した紙面を紹介する。

神職である禰宜(ねぎ)の千葉県彦さんの話によると、灯明台はかつて7海里(沖合約12キロ)先まで見え、海上に漁へ出た漁師たちの目印となつたといふ。灯明台ができる前の漁師たちの目印は、船橋大神宮の常夜灯だったが、19世紀に建てた理由は、地域で一番の小高い山だからだ。建築に携わった人間はまだ不明だが、どうやら

の戊辰戦争で焼けてしまった。明かりは貴重で、漁師たちの頼みの綱だった。灯明台は燃えてしまつた常夜灯の代わりに建てたと言われている。この地域に建てた理由は、地域で一番の小高い山だからだ。建築に携わった人間はまだ不明だが、どうやら



灯明台の前で歴史について語る船橋大神宮の千葉さん



林下凜音さん

生き物“楽園”三番瀬

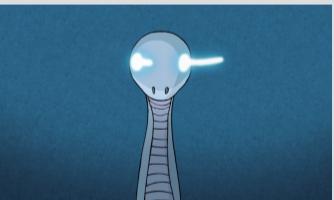
海の幸、豊かさ今も



三番瀬で暮らす生き物を取材する林下記者

雪どけ塚の白ヘビ

昔、夏見城を囲む土塁の近くに「雪どけ塚」と呼ばれる不思議な小高い塚があった。松の木の根元の穴に住む白ヘビは夜になると姿を現し、光る目の美しいと、やさしく気品のあるたたずまいで村人を魅了していた。ある日、出漁していた漁師が嵐に遭い、沖に流された。遠方に見つけた青い光を白ヘビの目だと信じて死に物ぐるいでかいをござ続けた…。



「雪どけ塚の白ヘビ」のワンシーン



海と日本プロジェクト
さまざまななかたちで日本人の暮らしを支え、ときに心の安らぎやワクワク、ひらめきを与えてくれる海で進行している環境の悪化などの現状を、子供たちをはじめ全国の人たちが「自分ごと」としてとらえ、海を未来へ引き継ぐアクションの輪を広げていくため、日本財團、総合海洋政策本部、国土交通省の旗振りのもと、オールジャパンで推進している。

私は、地元である船橋の大変さを学ぶことができ

り、その中でも一番高い

ところから「雪どけ塚」と呼

ばれ民話として親しまれて

きたこの場所は、「これから

も変わらず守られていくこ

とを願う。

雪が降っても積もらない

ところから「雪どけ塚」と呼

ばれ民話として親しまれて

きたこの場所は、「これから

も変わらず守られていくこ

とを願う。

雪が降っても積もらない